



COVID-19 その後の世界

小松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

今、世界中が新型コロナウイルス感染症に苦しんでいる。ウィルスは人に恐怖を与え、社会の空気を変え、不安を変容させ膨らませている。

WHO（世界保健機関）は新型コロナウイルス感染症をCOVID-19と命名した。2002年にSARS(重症急性呼吸器症候群)を起こしたウィルスの変異型SARS-CoV2の感染症だ。SARSでの世界の感染者は約8,000人、死者数は約770人だったが、COVID-19では6月1日時点で感染者が約612万人、死者数は37万人を超え、SARSの比でない。2002年のSARSは今回のコロナパンデミックの予告編だったのか。

命と社会を守るため、世界各地、日本で緊急事態宣言が出された。人は活動停止を余儀なくされ、それは経済活動の停滞や停止となり、企業経営にも影響するなど二次的な不安が急速、急激に広がる。諦め、不満、怒りなども加わり不安は大きさを増し、複雑化してゆく。

科学や医療技術、社会システムが発達した現代でも感染対策が、カミュが小説「ペスト」に描いた時代の「外出禁止」と変わらないとは。ウィルス対人の構図は昔も今も変わらない。

高病原性鳥インフルエンザという怖い感染症の経験者としてCOVID-19に関心を持ち、見えないものへの「不安」、そして発生の根本にあるだろう人、動物、ウィルスの関係を考えてみた。

COVID-19に抱いた私のイメージは「不安」。

鳥インフル発生時、感染がいつ起きるのか、動物園がこの先どうなるか、わからないことが常に不安であった。今起きているコロナ禍のような大それたものではなかったが。

中国でCOVID-19が発生した当初、事の理解が不十分でもあり、不安はぼんやりだったのだろう。その後、クルーズ船や帰国者が関係した国内発生を知り、不安はにわかに現実味を帯びた。感染病態の情報不足、診断環境の未整備、ワクチンや特效薬の未開発などで具体的な不安が高まった。簡易検査、ワクチン、治療薬があるインフルエンザと同じようにはいかない。

やがて世界各地で死者が急増、国内では有名人の感染死が報道されるなど、死が頭を過り、不安はさらに凝集していった。自身の感染が職場閉鎖などにも影響しかねない空気感が漂い新たな不安ものし掛かった。

緊急事態宣言が出され、街から人が消え、社会は一変した。経済活動に急ブレーキがかかり、仕事や暮らしの先行きなど二次的な不安が社会に広がった。感染死ではなく失業死を叫ぶ人、無責任なSNSでの誹謗中傷など、社会の秩序崩壊を思わせる一面ものぞかせる。不満や怒りなども層状に加わり、不安は雪だるまのように膨らむ。カミュが描いた時代と現代事情では異なるだろうが、不安の根は同じだろう。医療人類学者で精神科医の宮地尚子氏はコロナの不安を「予測不能な時間」と表現した。

なす術がない不安な人はただ隠れるしかない。敵から身を守り闘うためのワクチンや治療薬がなければ不安は消えない。開発は必須だ。二次的な不安は先の暮らしが見えないからだ。支援の仕方は複雑な社会だからこそ悩ましいが、実質的支援と心の支援が不可欠だ。最前線で社会を支えた人々が消えてしまったら元も子もない。

社会は今、「新しい生活様式」を模索する。上手にウイルスと付き合い、今を乗り切るため必要だが、未曾有のこのパンデミックの背景を分析し、コロナ後の新しい生き方を考えてゆくことも必要ではないだろうか。COVID-19のような新興感染症は人と自然との関わり方や地球規模の生態系のアンバランスなどが基底にあるとも言われている。単に元に戻るのではなく、地球、生態、生物に目を向け生きるためにも、人、動物、ウイルスの関係に着目してみた。

3年前に環境省の依頼で動物園鳥のインフルエンザ対策検討委員会に出席した。動物感染症が専門の大学教授と何度かお会いし興味深い話を伺った。人の新型インフルエンザは、元々鳥と鳥の間で生きてきた鳥インフルエンザウイルスが家禽や豚を経由し、新たに人の間で生き続けることのできるように変異したことで起きた感染症であると。野鳥のウイルスが、鳥のように群れ、自由に移動する人を好適な生き物として見つけて感染したのだとしたら恐ろしい。

COVID-19の場合はどうなのだろうか。人への感染の道筋はまだ明らかではない。発生はSARSと同じ中国だが、ウイルスの野生での居場所にコウモリ説がある。そこから人にどう感染したかは明確になっていないようだ。中国で

はある種の家畜と言ってもいい養殖タケネズミが食用にされているようだが、それが野生コウモリから人へのウイルス仲介役になっているとの説がある。この説が事実とすれば、COVID-19は新型インフルエンザ発生と同じ構図になる。コウモリで生きるコロナウイルスが、人に関わる家畜（食用タケネズミ？）を介し、コウモリと似た群生活、発声会話（コウモリは超音波だが）、自由移動で生きる人に入り、生き続けようとしたのだ。不気味な想像だがウイルスは生き続けるために人を見つけたように思えてくる。

二つの新興感染症は、ウイルス、野生動物、家畜、人の関係性で成立している。野生のウイルスが人領域内の食用動物（家畜・家禽）を仲介役に、人に入り込み、人の間で生き続けるために感染力を高めているようにも思えてくる。

21世紀に入り、SARS、MARS、新型インフルエンザ、そしてCOVID-19と新興感染症が立て続けに発生している。人口急増、食糧不足、農牧畜用地拡大、人の野生への過度な侵入、接触という構図が感染症の下地にあると国連環境計画は指摘する。裏返しは、森林破壊、地球温暖化、生物絶滅、自然生態系の動的平衡の崩れだ。ウイルスなど微生物世界も生態系破壊の影響を受ける側で異常分布や異所感染が起きる。さらにウイルスは人に入り、数日で地球の裏側まで運ばれるグローバル化の時代でもある。

世界は今、COVID-19と戦いながらも、ウイルスとつきあう新たな生活様式を模索するが、人は自然と向き合い、生き物皆がバランスよく共存できる世界を併せて考えていくことも必要だろう。COVID-19は成長と豊かさを求め続けてきた人類に「奢ってはいけない」と自然からの警告を代弁しているようだ。